

近代思想史における「異郷」としての日本

沖田 行司

思想の形成において、思想主体または思想そのものが、「思想する空間」、たとえば「家」であったり、「故郷」であったり、「国家」であるというような、長い歴史を通して培養されてきた共同性に深く根ざす場合と、そうした共同性に違和感をもち、そこから疎外されることによって、それとは異なるところに思想の基盤を求めるところがある。前者のように「思想する主体」と「思想する空間」の間に一定の親和性を保持する人間の思想形成においては、そうした共同性を象徴する「日本」との間に本質的な葛藤はうみだされない。しかし、そのような共同性こそ、思想の形成と思想主体の確立にとつての桎梏であると意識する人間には、まさにその共同性と分かちがたく存在する「日本」は克服すべき思想課題に他ならなかった。つまり「日本」の異郷化である。

異質な文化や思想が交わる近代社会では、異質な文化や思想が受容されて行くにしがたが、それまでの社会においては自明の理として存在した共同性や、それとの親和性というものは解体を迫られる。こうした共同性の喪失は、同時に思想の基盤となるものの喪失もしくは不可視の状況をもたらした。こうした状況の出現は、至るところで様々な問題を引き起こした。たとえば、生活することと思想することの間に一定の不協和音が奏でられる状況は、あらたな思想の基盤となるものの再構築を必要とするのである。この再構築なくしては、思

想はただただ脆弱化するしかないのである。

近代日本の思想家に突き付けられた課題は、まさにここにあった。とりわけ、強烈な自我の下に、個の自立をはかり、または近代国民国家を支える個の主体性を確立しようとした思想家にとって、彼らが生活する「場」
|| 共同性は、彼らの思想を心地よく受けとめ、培養するものではなかった。自明の理とされてきた共同性は、むしろ彼らを疎外する「異郷」に他ならなかったのである。

大坂から中津に帰郷した福沢諭吉にとって、中津はまさに「異郷」の地であった。そこにあつた共同性は福沢を受け入れ、福沢自身の主体性を確立する基盤となるには程遠く、福沢を疎外する以外のなものでもなかった。福沢のこの「故郷喪失」の原体験は、彼の思想形成に大きな意味をもつようになる。福沢の故郷喪失は単なる感傷的な喪失意識に止まらず、門閥制度に象徴される、故郷の思想的風土への積極的な批判という方向に展開するのである。こうした福沢の思想の営みにおいて、思想の基盤となったものは一体何であつたのだろうか。とりわけ、個の確立とそれを保証する国家の独立という福沢のナショナリズム構想は、それまでの福沢を取り巻いてきた因習に満ちた旧世界との決別を意味するものであつた。福沢にとって、既存の共同性を象徴する「日本」は、思想としていかなる意味合いをもつたのであろうか。日本の「異郷」化はなされたのかなされなかつたのか。なされたとするならばどのようなようになされたのか。なされなかつたとするならば、何故なされなかつたのか。露口報告はそうした問題を考えようとするものである。

キリスト教という、西洋文明を象徴する宗教を立脚点として思想を形成した内村鑑三にとって、キリスト教を異教視する日本の共同性は、内村の主観的な意図と思入れとは無関係に、「異郷」として内村に迫るものであつた。後に内村は日本に生まれたこととアメリカへ留学したこと、それにキリスト教信者となつたことを後悔すると述べている。とくにアメリカ留学がなければ「日本国の悪き所が見えずして其改革の要」を認めることもなかつたし、キリスト教信者にならなければ心に「大理想」も湧きいずることなく、「忠君愛國論」に安住することができたと回顧している。とりわけ不敬事件を引き起こしたキリスト教信仰は内村がこの日本社会で身を処する上に非常な困難をもたらすものであつた。「二つのJ」に仕える内村にとって、「二つのJ」に

不寛容であり、内村自身を疎外した日本とは何であったのか。どのような共同性と戦い、どのような共同性と和解したのか。原島報告はこの課題に迫ろうとするものである。

超国家主義の時代から、曖昧ではあるが、しかし可能性をもつと信じた戦後民主主義の時代を、ひたすら個人の主体性の確立と近代市民としての自立を求めて生きた丸山眞男にとって、個人の自立と主体性を許容しようとしないう所の日本は、「異郷」に他ならなかった。超近代と前近代との同居に日本近代の特性を発見し、その究明を思想史研究のモチーフとした丸山は、天皇制国家の政治支配とイデオロギーの分析を通して、日本社会の病理を析出しようとする。精神的権威と政治権力を併せもつた天皇の絶対性は個人の内面の自由、あらゆる私事性を規制する原理として貫徹されるのであるが、丸山が天皇制に向けた批判は、丸山が福沢について述べた「日本人の思考様式と日常的な生活態度に対するその透徹した批判」でもあった。この時、丸山が思想が立脚する日本とは一体何であったのか。天皇制を軸とした日本の共同性を「異郷」化する時、丸山に見えた日本とは一体どのようなものであったのだろうか。西田報告はこの問題を視野に入れて、近代思想史における丸山の存在を再度考察しようとするものである。

日本の近代思想家を代表するこの三者の思想に観念として内在化され、再構築された「日本」と現実の日本との違和感を象徴するものとして「異郷」という用語を想定した。さらに、「近代思想史における「異郷」としての日本」というテーマは、イデオロギーの終焉が宣告され、ボードレスの時代を迎えて国家の境界が曖昧となり、いよいよ思想の基盤が不可視になっている現代日本の思想状況を視野の内に入れようとするものでもある。

中国において「日本の思想」は可能なのか、イギリスにおいて「日本の思想」は有効性をもつのであろうか。アメリカにおいて「日本の思想」はアメリカを「異郷」化する事が可能であろうか。「日本の思想」の可能性をこのように考えたとき、「異郷」としての日本」で形成される思想が重要な意味をもってくる。イギリスにおいて生み出されたシェークスピア劇は世界のいたるところの劇場で様々な言語に転換されて演じられている。そして、それがその国の文化の一部として定着した時、シェークスピア劇にとつてのイギリスは周縁化されて、

もはや中心ではありえなくなるように、日本の再構築を促した「異郷としての日本」の発見は、日本の脱中心化であり、またある意味においては西洋の脱中心化を伴うものであったのではなからうか。こうした意味において、近代日本の思想史において、「異郷としての日本」がもつ意味を明らかにすることは、きわめて重要な思想史研究の課題であると考えた。

シンポジウムのテーマ設定にあたり、幾度か議論を重ねたが、必ずしも報告者に共通した認識が成立していたわけではない。また、対象として取り上げた三人の思想家には、それぞれ固有の「日本」像が確立しており、「異郷としての日本」というテーマに必ずしも馴染まない思想特質をもっていたとする見方も存在した。したがって、日本を「異郷」視する観念の剔出は容易ではなかった。しかし、こうした視点で日本の近代思想を再点検することの意義を理解していただければ、この企画の意図は半ば達成されたといえる。

(同志社大学教授)